

# 東大 2018 年度数学解答例

文殊の知恵  
中田昌輝

目次

第 1 問	1
第 1 問問題文 . . . . .	1
第 1 問解答例 . . . . .	2
第 2 問	5
第 2 問問題文 . . . . .	5
第 2 問解答例 . . . . .	6
第 3 問	9
第 3 問問題文 . . . . .	9
第 3 問解答例 . . . . .	10

## 第 1 問

## 第 1 問 問題文

次の連立一次方程式を解く問題を考える.

$$\mathbf{A}\mathbf{x} = \mathbf{b}$$

ここで,  $\mathbf{A} \in \mathcal{R}^{m \times n}$ ,  $\mathbf{b} \in \mathcal{R}^m$  は与えられた定数の行列とベクトルであり,  $\mathbf{x} \in \mathcal{R}^n$  は未知ベクトルである. 以下の問いに答えよ.

- (1)  $\overline{\mathbf{A}} = (\mathbf{A} | \mathbf{b})$  のように, 行列  $\mathbf{A}$  の最後の列の後ろに 1 列追加した  $m \times (n+1)$  行列を作る. 例えば,  $\mathbf{A} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 \\ 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{b} = \begin{pmatrix} 2 \\ 4 \\ 2 \end{pmatrix}$  の場合には,  $\overline{\mathbf{A}} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & 2 \\ 1 & 1 & 0 & 4 \\ 0 & 1 & 1 & 2 \end{pmatrix}$  となる. この例の  $\overline{\mathbf{A}}$  の第  $i$  列ベクトルを  $\mathbf{a}_i$  ( $i = 1, 2, 3, 4$ ) とする.

(i)  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  のうち線形独立なベクトルの最大個数を求めよ.

(ii)  $\mathbf{a}_4$  が  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  の線形和で表されることを,  $\mathbf{a}_4 = x_1\mathbf{a}_1 + x_2\mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3$  となるスカラー  $x_1, x_2$  を求めることで示せ.

(iii)  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3, \mathbf{a}_4$  のうち線形独立なベクトルの最大個数を求めよ.

- (2) 任意の  $m, n$ ,  $\mathbf{A}, \mathbf{b}$  に対して,  $\text{rank}\overline{\mathbf{A}} = \text{rank}\mathbf{A}$  のとき連立一次方程式の解が存在することを示せ.

- (3)  $\text{rank}\overline{\mathbf{A}} > \text{rank}\mathbf{A}$  ならば解は存在しない.  $m > n$ ,  $\text{rank}\mathbf{A} = n$  で,  $\text{rank}\overline{\mathbf{A}} > \text{rank}\mathbf{A}$  のとき, 連立一次方程式の右辺と左辺の差のノルムの 2 乗  $\|\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}\|^2$  を最小にする  $\mathbf{x}$  を求めよ.

- (4)  $m < n$ ,  $\text{rank}\mathbf{A} = m$  のとき, どのような  $\mathbf{b}$  に対しても連立一次方程式を満たす解が複数存在する. 解のうちで  $\|\mathbf{x}\|^2$  を最小にする  $\mathbf{x}$  を, 連立一次方程式の制約条件として, ラグランジュ乗数法を用いて求めよ.

- (5) 任意の  $m, n$ ,  $\mathbf{A}$  に対して, 以下の 4 つの式を満たす  $\mathbf{P} \in \mathcal{R}^{n \times m}$  が唯一に決まることを示せ.

$$\begin{aligned} \mathbf{A}\mathbf{P}\mathbf{A} &= \mathbf{A} \\ \mathbf{P}\mathbf{A}\mathbf{P} &= \mathbf{P} \\ (\mathbf{A}\mathbf{P})^T &= \mathbf{A}\mathbf{P} \\ (\mathbf{P}\mathbf{A})^T &= \mathbf{P}\mathbf{A} \end{aligned}$$

- (6) (3) で求めた  $\mathbf{x}$  と (4) で求めた  $\mathbf{x}$  が, いずれも  $\mathbf{x} = \mathbf{P}\mathbf{b}$  の形で表せることを示せ.

## 第 1 問 解答例

- (1) (i)  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  が線形従属の関係にある場合, 実数  $c$  ( $\neq 0, \in \mathbb{R}$ ) を用いて

$$\mathbf{a}_1 = c \mathbf{a}_2$$

と表すことができる. しかし,  $\mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{a}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$  であることから, これを満たす実数  $c$  は存在しないので,  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  は線形独立なベクトルである. 次に,  $\mathbf{a}_3$  が  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  の線形従属の関係にある場合, 実数  $c_1, c_2$  ( $\neq 0, \in \mathbb{R}$ ) を用いて

$$\mathbf{a}_3 = c_1 \mathbf{a}_1 + c_2 \mathbf{a}_2$$

と表すことが出来る.  $\mathbf{a}_3 = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  であるので,  $c_1 = -1, c_2 = 1$  とすればこの式は満たされる. ゆえに  $\mathbf{a}_3$  は線形従属の関係にあるので, 線形独立なベクトルの最大個数は 2 個である.

- (ii)  $\mathbf{a}_4$  について  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  の線形和で表されることを  $x_1, x_2$  を求めることで示す.

$$\begin{aligned} \mathbf{a}_4 &= x_1 \mathbf{a}_1 + x_2 \mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3 \\ \iff \begin{pmatrix} 2 \\ 4 \\ 2 \end{pmatrix} &= x_1 \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + x_2 \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \\ \iff \begin{cases} 2 &= x_1 - 1 \\ 4 &= x_1 + x_2 \\ 2 &= x_2 + 1 \end{cases} \\ \iff \begin{cases} x_1 &= 3 \\ x_2 &= 1 \end{cases} \end{aligned}$$

したがって,  $x_1 = 3, x_2 = 1$  というスカラーの組が求まったので,  $\mathbf{a}_4$  は  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  の線形和で表される.

- (iii)  $\mathbf{a}_4$  は  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  の線形和で表されることから  $\mathbf{a}_4$  は  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  と線形従属な関係であるので, 線形独立なベクトルの最大個数は 2 個である.

- (2) 行列  $\mathbf{A}$  の第  $i$  列ベクトルを  $\mathbf{a}_i$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) とする.  $\text{rank } \overline{\mathbf{A}} = \text{rank } \mathbf{A}$  のとき, 実数  $c_i$  ( $\neq 0, \in \mathbb{R}$ ) を用いて

$$\mathbf{b} = \sum_{i=1}^n c_i \mathbf{a}_i$$

と表すことができる. この  $c_i$  を 1 から順に  $n$  まで縦に並べた  $\mathbf{c} = \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_n \end{pmatrix}$  をつくと

$$\mathbf{A}\mathbf{c} = \mathbf{b}$$

となるので,  $\mathbf{c}$  は連立方程式の解  $\mathbf{x}$  となる. ゆえに題意は示された.

- (3) 以下のように変形することができる.

$$\begin{aligned} \|\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}\|^2 &= (\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x})^T (\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}) \\ &= (\mathbf{b}^T - \mathbf{x}^T \mathbf{A}^T) (\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}) \\ &= \mathbf{x}^T \mathbf{A}^T \mathbf{A} \mathbf{x} - 2\mathbf{x}^T \mathbf{A}^T \mathbf{b} + \mathbf{b}^T \mathbf{b} \end{aligned}$$

これを  $\mathbf{x}$  で微分すると

$$\frac{\partial \|\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}\|^2}{\partial \mathbf{x}} = 2\mathbf{A}^T \mathbf{A} \mathbf{x} - 2\mathbf{A}^T \mathbf{b}$$

となる. ゆえに最小となる必要条件は

$$\mathbf{A}^T \mathbf{A} \mathbf{x} = \mathbf{A}^T \mathbf{b}$$

である.  $\text{rank} \mathbf{A} = n$  かつ  $\text{rank} \overline{\mathbf{A}} > \text{rank} \mathbf{A}$  のとき,  $\text{rank}(\mathbf{A}^T \mathbf{A}) = n$  となる. ゆえに  $\mathbf{A}^T \mathbf{A}$  は正則であるので, 逆行列が存在して

$$\begin{aligned} (\mathbf{A}^T \mathbf{A})^{-1} \mathbf{A}^T \mathbf{A} \mathbf{x} &= (\mathbf{A}^T \mathbf{A})^{-1} \mathbf{A}^T \mathbf{b} \\ \iff \mathbf{x} &= (\mathbf{A}^T \mathbf{A})^{-1} \mathbf{A}^T \mathbf{b} \end{aligned}$$

となる.

- (4) 目的関数  $\|\mathbf{x}\|^2$  は二次関数であるので微分可能で凸性をもつ. 制約条件は  $\mathbf{A}\mathbf{x} = \mathbf{b}$  であるのでラグランジュ関数は以下のようにおける.

$$L(\mathbf{x}, \boldsymbol{\lambda}) = \frac{1}{2} \|\mathbf{x}\|^2 - \boldsymbol{\lambda}^T (\mathbf{A}\mathbf{x} - \mathbf{b})$$

ゆえに  $\mathbf{x}, \boldsymbol{\lambda}$  それぞれで偏微分して  $\mathbf{0}$  とおくと

$$\begin{cases} \frac{\partial L(\mathbf{x}, \boldsymbol{\lambda})}{\partial \mathbf{x}} = \mathbf{x} - \mathbf{A}^T \boldsymbol{\lambda} = \mathbf{0} \\ \frac{\partial L(\mathbf{x}, \boldsymbol{\lambda})}{\partial \boldsymbol{\lambda}} = -\mathbf{A}\mathbf{x} + \mathbf{b} = \mathbf{0} \end{cases} \quad (1.1)$$

式 (1.1) の上式について整理すると

$$\mathbf{x} = \mathbf{A}^T \boldsymbol{\lambda}$$

となる.  $\text{rank}(\mathbf{A}^T \mathbf{A}) = m$  であるから 逆行列が存在することを考慮して, 式 (1.1) に代入すると,

$$\begin{aligned} -\mathbf{A}(\mathbf{A}^T \boldsymbol{\lambda}) + \mathbf{b} &= \mathbf{0} \iff (\mathbf{A}\mathbf{A}^T) \boldsymbol{\lambda} = \mathbf{b} \\ \iff \boldsymbol{\lambda} &= (\mathbf{A}\mathbf{A}^T)^{-1} \mathbf{b} \end{aligned}$$

ゆえに, 求める解は

$$\mathbf{x} = \mathbf{A}^T (\mathbf{A}\mathbf{A}^T)^{-1} \mathbf{b}$$

- (5) この問題のメインテーマは一般逆行列である [1].

まず存在性について述べる.

全ての行列には特異値分解することができ,  $m \times m$  の直交行列を  $\mathbf{U}$ ,  $m \times n$  の対角線上に非負の実数, それ以外が 0 である行列を  $\boldsymbol{\Sigma}$ ,  $n \times n$  の直交行列を  $\mathbf{V}$  とする. すると  $\mathbf{A}$  について

$$\mathbf{A} = \mathbf{U}\boldsymbol{\Sigma}\mathbf{V}^T$$

と因数分解することができる. ここで,  $\boldsymbol{\Sigma}$  の対角成分,  $i$  行  $i$  列目を  $\sigma_{ii}$  と表す.  $\boldsymbol{\Sigma}^T$  を  $n \times m$  の対角成分  $i$  行  $i$  列目を  $\sigma_{ii}^{-1}$ , それ以外を 0 である行列とする. ここで  $\mathbf{P}$  を以下のように定める.

$$\mathbf{P} = \mathbf{V}\boldsymbol{\Sigma}^+ \mathbf{U}^T$$

$$\boldsymbol{\Sigma}\boldsymbol{\Sigma}^+ \text{ と } \boldsymbol{\Sigma}^+\boldsymbol{\Sigma} \text{ について, } \mathbf{D}_n = \begin{pmatrix} \sigma_{11} & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \sigma_{22} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \dots & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \sigma_{nn} \end{pmatrix}, \mathbf{D}_n^+ = \begin{pmatrix} \sigma_{11}^{-1} & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \sigma_{22}^{-1} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \dots & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \sigma_{nn}^{-1} \end{pmatrix} \text{ とすると}$$

- $n \leq m$  のとき

$\boldsymbol{\Sigma}\boldsymbol{\Sigma}^+$  は  $m \times m$  行列,  $\boldsymbol{\Sigma}^+\boldsymbol{\Sigma}$  は  $n \times n$  行列になる. ゆえにそれぞれ計算すると

$$\begin{aligned} \boldsymbol{\Sigma}\boldsymbol{\Sigma}^+ &= \begin{pmatrix} \mathbf{D}_n \\ \mathbf{0}_{m-n \times n} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \mathbf{D}_n^+ & \mathbf{0}_{m-n \times n} \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \mathbf{E} & \mathbf{0}_{m-n \times n} \\ \mathbf{0}_{m-n \times n} & \mathbf{0}_{m-n \times m-n} \end{pmatrix} \end{aligned}$$

同様にして,

$$\begin{aligned}\Sigma^+\Sigma &= \begin{pmatrix} D_n^+ & \mathbf{0}_{m-n \times n} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} D_n \\ \mathbf{0}_{m-n \times n} \end{pmatrix} \\ &= E\end{aligned}$$

•  $n > m$  のとき

$$\begin{aligned}\Sigma\Sigma^+ &= \begin{pmatrix} D_m & \mathbf{0}_{n-m \times m} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} D_m^+ \\ \mathbf{0}_{n-m \times m} \end{pmatrix} \\ &= E\end{aligned}$$

同様にして,

$$\begin{aligned}\Sigma^+\Sigma &= \begin{pmatrix} D_m^+ \\ \mathbf{0}_{n-m \times m} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} D_m & \mathbf{0}_{m-n \times m} \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} E & \mathbf{0}_{n-m \times m} \\ \mathbf{0}_{n-m \times m} & \mathbf{0}_{n-m \times n-m} \end{pmatrix}\end{aligned}$$

このことから定めた  $P$  が与式を満たすことを示す.

$$\begin{aligned}APA &= U\Sigma V^T V\Sigma^+ U^T U\Sigma V^T = U\Sigma\Sigma^+ \Sigma V^T = U\Sigma V^T = A \\ PAP &= V\Sigma^+ U^T U\Sigma V^T V\Sigma^+ U^T = V\Sigma^+ \Sigma\Sigma^+ U^T = V\Sigma^+ U^T = P \\ (AP)^T &= P^T A^T = (V\Sigma^+ U^T)^T (U\Sigma V^T)^T = (U\Sigma^+ V^T)(V\Sigma U^T) \\ &= UU^T = U\Sigma\Sigma^+ U^T = U\Sigma V^T V\Sigma^+ U^T = AP \\ (PA)^T &= (V\Sigma^+ U^T U\Sigma V^T)^T = (V\Sigma^+ \Sigma V)^+ = V(\Sigma^+ \Sigma) V^T = V\Sigma^+ U^T U\Sigma V^T = PA\end{aligned}$$

次に唯一性について示す.  $A$  に対して与式を満たす  $P$  が複数存在すると仮定し, これらのうち 2 つを  $P_1, P_2$  とする. すると

$$AP_1 = (AP_2 A)P_1 = (AP_2)(AP_1) = (AP_2)^T (AP_1)^T = P_2^T (AP_1 A)^T = P_2^T A^T = (AP_2)^T = AP_2$$

同様にして,  $P_1 A = P_2 A$  がいえる. よって,

$$P_1 = P_1 A P_1 = P_1 A P_2 = P_2 A P_2 = P_2$$

となり,  $P_1 = P_2$  であるから  $P$  は一つのみである.

以上のことから題意は示された.

(6) まず, (3) について  $P' = (A^T A)^{-1} A^T$  とおけば,  $x = P'b$  となる. この  $P'$  が (5) の与式を満たすことを示す.

$$\begin{aligned}AP'A &= A(A^T A)^{-1} A^T A = A \\ P'AP' &= (A^T A)^{-1} A^T A(A^T A)^{-1} A^T = (A^T A)^{-1} A^T = P' \\ (AP')^T &= P'^T A^T = ((A^T A)^{-1} A^T)^T A^T = A(A^T A)^{-1} A^T = AP' \\ (P'A)^T &= A^T P'^T = A^T ((A^T A)^{-1} A^T)^T = E = (A^T A)^{-1} A^T A = P'A\end{aligned}$$

となり, 満たされている.

次に, (4) の場合について  $P'' = A^T(AA^T)^{-1}$  とおけば

$$\begin{aligned}AP''A &= AA^T(AA^T)^{-1} A = A \\ P''AP'' &= A^T(AA^T)^{-1} AA^T(AA^T)^{-1} = A^T(AA^T)^{-1} = P'' \\ (AP'')^T &= (AA^T(AA^T)^{-1})^T = E = AA^T(AA^T)^{-1} = AP'' \\ (P''A)^T &= (A^T(AA^T)^{-1} A)^T = A^T(AA^T)^{-1} A = P''A\end{aligned}$$

よって, 題意は示された.

## 第 2 問

## 第 2 問 問題文

関数  $f_1$  を  $[0, 1]$  上で定義される正値の定数関数とし,  $f_1(x) = c$  とおく. また, 正の実数  $p, q$  を  $1/p + 1/q = 1$  を満たすものとする. これらに対し,  $[0, 1]$  上で定義される関数の列  $\{f_n\}$  を

$$f_{n+1}(x) = p \int_0^x (f_n(t))^{1/q} dt$$

で定める. 以下の問いに答えよ.

- (1)  $a_1 = 0, c_1 = c$  かつ

$$\begin{aligned} a_{n+1} &= q^{-1}a_n + 1 \quad (n = 1, 2, \dots), \\ c_{n+1} &= \frac{p(c_n)^{1/q}}{a_{n+1}} \quad (n = 1, 2, \dots) \end{aligned}$$

で定まる実数列  $\{a_n\}$  と  $\{c_n\}$  を用いて  $f_n(x) = c_n x^{a_n}$  と表されることを示せ.

- (2)  $n \geq 2$  に対し  $[0, 1]$  上で定義される関数  $g_n$  を  $g_n(x) = x^{a_n} - x^p$  とおく.  $n \geq 2$  に対し  $a_n \geq 1$  となることに注意して,  $g_n$  がある点  $x = x_n$  で最大値をとることを示し, この  $x_n$  を求めよ.

- (3) 任意の  $x \in [0, 1]$  に対して  $\lim_{n \rightarrow \infty} g_n(x) = 0$  となることを示せ.

- (4)  $d_n = (c_n)^{q^n}$  とおく.  $d_{n+1}/d_n$  が  $n \rightarrow \infty$  のとき有限な正の値に収束することを示せ.  
なお,  $\lim_{t \rightarrow \infty} (1 - 1/t)^t = 1/e$  となることは用いて良い.

- (5)  $\lim_{n \rightarrow \infty} c_n$  の値を求めよ.

- (6) 任意の  $x \in [0, 1]$  に対して  $\lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) = x^p$  となることを示せ.

## 第 2 問 解答例

(1) 数学的帰納法によって示す.

(i)  $n = 1$  のとき,

$$f_1(x) = c = c \cdot x^0 = c_1 x^{a_0}$$

となるので, 成立する.

(ii)  $n = k$  のとき  $f_n(x) = c_n x^{a_n}$  であると仮定すると,  $n = k + 1$  のときは

$$\begin{aligned} f_{k+1}(x) &= p \int_0^x ((f_k(t))^{1/q} dt \\ &= p \int_0^x (c_k x^{a_k})^{1/q} dt \\ &= p \left[ c_k^{1/q} \cdot \frac{q}{a_k + q} x^{\frac{a_k + q}{q}} \right]_0^x \\ &= p c_k^{1/q} \cdot \frac{1}{q^{-1} a_k + 1} x^{q^{-1} a_k + 1} \\ &= \frac{p c_k^{1/q}}{a_{k+1}} x^{a_{k+1}} \\ &= c_{k+1} x^{a_{k+1}} \end{aligned}$$

となり, 成立する.

(i),(ii) より, 数学的帰納法より, 題意は示された.

(2)  $n \geq 2$  のとき,

$$g'_n(x) = a_n x^{a_n - 1} - p x^{p-1}$$

ここで,  $a_n$  の一般項を求める. 特性方程式  $\alpha = q^{-1}\alpha + 1$  を解くことによって,  $\alpha = p$  となる. ゆえに

$$\begin{aligned} a_n - p &= q^{-1} (a_n - p) \\ a_n &= p (1 - q^{1-n}) < p \end{aligned}$$

ゆえに,  $g'_n(x) = 0$  となるときは

$$\begin{aligned} g'_n(x) &= 0 \\ \iff a_n x^{a_n - 1} - p x^{p-1} &= 0 \\ \iff x^{a_n - 1} (a_n - p x^{p - a_n}) &= 0 \\ \iff x = 0, \left( \frac{a_n}{p} \right)^{\frac{1}{p - a_n}} \end{aligned}$$

$g'_n(1) = a_n - p < 0$  より増減表は以下のように書くことができる.

$x$	0	...	$\left( \frac{a_n}{p} \right)^{\frac{1}{p - a_n}}$	...	1
$g'_n(x)$	0	+	0	-	$a_n - p$
$g_n(x)$	0	↗		↘	0

よって,  $x_n = \left( \frac{a_n}{p} \right)^{\frac{1}{p - a_n}}$  のとき最大値をとることが示された.

(3) まず,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \{p(1 - q^{1-n})\} = p$$



より,

$$\begin{aligned}\lim_{n \rightarrow \infty} g'_n(x) &= \lim_{n \rightarrow \infty} a_n x^{a_n-1} - p x^{p-1} \\ &= p x^{p-1} - p x^{p-1} \\ &= 0\end{aligned}$$

これより関数  $g'_n(x)$  は区間  $[0, 1]$  において増減がなく,  $n \rightarrow \infty$  において  $g_n(0) = g_n(1) = 0$  であるから, 任意の  $x \in [0, 1]$  に対しても  $n \rightarrow \infty$  において  $g_n(x) = 0$  となる. よって, 題意は示された.

(4)  $q$  の大きさについて

$$\begin{aligned}\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1 &\implies \frac{1}{q} < 1 \\ &\iff q > 1\end{aligned}$$

となる.  $d_{n+1}/d_n$  について整理すると

$$\begin{aligned}\frac{d_{n+1}}{d_n} &= \frac{\left(\frac{p(c_n)^{1/q}}{a_{n+1}}\right)^{q^{n+1}}}{(c_n)^{q^n}} \\ &= \frac{p^{q^{n+1}}(c_n)^{q^n}}{(a_{n+1})^{q^{n+1}}(c_n)^{q^n}} \\ &= \frac{p^{q^{n+1}}}{(a_{n+1})^{q^{n+1}}} \\ &= \left(\frac{p}{p(1-q^{-n})}\right)^{q^{n+1}} \\ &= \left(\frac{1}{1-q^{-n}}\right)^{q^{n+1}} \\ &= \left\{\left(\frac{1}{1-\frac{1}{q^n}}\right)^{q^n}\right\}^q\end{aligned}$$

$q > 1$  より,  $n \rightarrow \infty$  のとき  $q^n \rightarrow \infty$  であることを用いて

$$\begin{aligned}\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{d_{n+1}}{d_n} &= \lim_{n \rightarrow \infty} \left\{\left(\frac{1}{1-\frac{1}{q^n}}\right)^{q^n}\right\}^q \\ &= e^q\end{aligned}$$

(5) はさみうちの原理で示す. まず,  $(1 - q^{1-n}) < 1$  であることより

$$c_n > (c_{n-1})^{1/q} > (c_{n-2})^{(1/q)^2} > \dots > c^{(1/q)^{n-1}}$$

となるので,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} c_n > 1$$

である. 次に上に有界であることを示す.

$$g(x) = \left(1 - \frac{1}{x}\right)^x$$

とおく. ここで  $x > 1$  で  $g(x) > 0$  であるので, 対数をとって

$$h(x) = x \log \left(1 - \frac{1}{x}\right)$$

としてこれが単調増加であることをいう.

$$\begin{aligned} h'(x) &= \log\left(1 - \frac{1}{x}\right) + x \cdot \frac{x}{x-1} \cdot \frac{1}{x^2} \\ &= \log\left(1 - \frac{1}{x}\right) + \frac{1}{x-1} \\ h''(x) &= \frac{x}{x-1} \cdot \frac{1}{x^2} - \frac{1}{(x-1)^2} \\ &= \frac{1}{x(x-1)} - \frac{1}{(x-1)^2} \\ &= -\frac{1}{x(x-1)} < 0 \end{aligned}$$

また,  $\lim_{x \rightarrow \infty} h'(x) = 0$  であるから,  $h(x) > 0$  である. ゆえに  $h(x)$  が単調増加であるので,  $g(x)$  も単調増加である. したがって,  $\left(\frac{1}{1 - \frac{1}{q^n}}\right)^{q^n}$  は単調減少関数である. ゆえに,

$$e^q \leq \frac{d_{n+1}}{d_n} \leq \frac{d_2}{d_1} = \left(\frac{q}{q-1}\right)^{q^2}$$

であることがいえる. ゆえに

$$\begin{aligned} \log\left(\frac{d_n}{d_{n-1}}\right) &\leq \log\left(\frac{q}{q-1}\right)^{q^2} \\ \iff \log d_n - \log d_{n-1} &\leq q^2 \log\left(\frac{q}{q-1}\right) \\ \iff \log d_n &\leq \log d_{n-1} + q^2 \log\left(\frac{q}{q-1}\right) \\ \implies \log d_n &\leq \log d_{n-2} + 2q^2 \log\left(\frac{q}{q-1}\right) \\ \implies \log d_n &\leq \log d_1 + nq^2 \log\left(\frac{q}{q-1}\right) \\ \implies \log(c_n)^{q^n} &\leq \log c^q + q^2 \log\left(\frac{q}{q-1}\right) \\ \implies q^n \log c_n &\leq q \log c + q^2 \log\left(\frac{q}{q-1}\right) \\ \implies \log c_n &\leq \frac{1}{q^{n-1}} \log c + \frac{1}{q^{n-2}} \log\left(\frac{q}{q-1}\right) \end{aligned}$$

となる.  $q > 1$  であることを考慮して

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \log c_n \leq 0$$

であるから,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} c_n \leq 1$$

ゆえにはさみうちの原理より,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} c_n = 1$$

(6) (1) より,  $f_n(x) = c_n x^{a_n}$  である.  $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \{p(1 - q^{1-n})\} = p$  と (5) より

$$\lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) = x^p$$

## 第3問

### 第3問 問題文

赤いカードが2枚と白いカードが1枚入った袋および複素数  $z_n, w_n$  ( $n = 0, 1, 2, \dots$ ) について考える. まず, 袋から1枚のカードを取り出し袋に戻す. このとき取り出されたカードの色に応じて  $z_{k+1}$  ( $k = 0, 1, 2, \dots$ ) を以下のルールで生成する.

$$z_{k+1} = \begin{cases} iz_k & \text{赤いカードが取り出された場合} \\ -iz_k & \text{白いカードが取り出された場合} \end{cases}$$

次に, 袋からもう一度1枚のカードを取り出し袋に戻す. このとき取り出したカードの色に応じて  $w_{k+1}$  を以下のルールで生成する.

$$w_{k+1} = \begin{cases} -iw_k & \text{赤いカードが取り出された場合} \\ iw_k & \text{白いカードが取り出された場合} \end{cases}$$

ここで, 各カードは独立に等確率で取り出されるものとする. また初期状態を  $z_0 = 1, w_0 = 1$  とする. すなわち,  $z_n, w_n$  は,  $z_0 = 1, w_0 = 1$  の状態から始め, 上記の一連の二つの操作を  $n$  回繰り返した後の値である. なお, ここでは  $i$  は虚数単位とする.

以下の問いに答えよ.

- (1)  $n$  が奇数のとき  $\operatorname{Re}(z_n) = 0$ , 偶数のとき  $\operatorname{Im}(z_n) = 0$  であることを示せ. ただし,  $\operatorname{Re}(z), \operatorname{Im}(z)$  はそれぞれ  $z$  の実部, 虚部を表すものとする.
- (2)  $z_n = 1$  である確率を  $P_n$ ,  $z_n = i$  である確率を  $Q_n$  とする.  $P_n, Q_n$  についての漸化式を立てよ.
- (3)  $z_n = 1, z_n = i, z_n = -1, z_n = -i$  である確率をそれぞれ求めよ.
- (4)  $z_n$  の期待値が  $(i/3)^n$  であることを示せ.
- (5)  $z_n = w_n$  である確率を求めよ.
- (6)  $z_n + w_n$  の期待値を求めよ.
- (7)  $z_n w_n$  の期待値を求めよ.

### 第3問 解答例

(1) 赤いカードが2回連続で出されたら

$$z_{k+2} = -z_k$$

となり、これは白いカードが2回連続で出された場合も同様である。赤いカードが取り出され、白いカードが取り出された場合

$$z_{k+2} = z_k$$

となり、これは白いカードが取り出され、赤いカードが取り出された場合も同様である。ゆえに、

$$z_{k+2} = \begin{cases} -z_k & \text{同じカードが2回連続で取り出された場合} \\ z_k & \text{異なるカードが取り出された場合} \end{cases}$$

ここで、 $n=0$ のとき  $z_0=1$  であるので、 $z_2$  は1または $-1$ の値をとる。帰納的に  $n=2k$  のとき  $z_n$  は1または $-1$ の値をとるので、 $\text{Im}(z_n)=0$  となる。一方で、 $n=1$ のとき、 $z_1$  は $i$ または $-i$ である。帰納的に  $n=2k+1$  のとき  $z_n$  は $i$ または $-i$ の値をとるので、 $\text{Re}(z_n)=0$  となる。よって、題意は示された。

(2) (1)の結果から  $n$  が偶数のとき1となる確率は  $P_n$  であり、 $-1$ となる確率は  $1-P_n$  である。同様に奇数の時  $i$  となる確率は  $Q_n$  であ、 $-i$ となる確率は  $1-Q_n$  である。したがって、 $P_n, Q_n$  の漸化式について偶奇で場合分けして求めることができ、

$n$  が偶数のとき ( $n \geq 2$ )

$$\begin{aligned} P_n &= \frac{1}{3}Q_{n-1} + \frac{2}{3}(1-Q_{n-1}) \\ &= -\frac{1}{3}Q_{n-1} + \frac{2}{3} \end{aligned}$$

$n$  が奇数のとき

$$\begin{aligned} Q_n &= \frac{2}{3}P_{n-1} + \frac{1}{3}(1-P_{n-1}) \\ &= \frac{1}{3}P_{n-1} + \frac{1}{3} \end{aligned}$$

よって、まとめると

$$P_n = \begin{cases} 1 & (n=0) \\ 0 & (n \text{ は奇数}) \\ -\frac{1}{3}Q_{n-1} + \frac{2}{3} & (n \text{ は2以上の偶数}) \end{cases}$$

$$Q_n = \begin{cases} \frac{2}{3} & (n=1) \\ 0 & (n \text{ は偶数}) \\ \frac{1}{3}P_{n-1} + \frac{1}{3} & (n \text{ は3以上の奇数}) \end{cases}$$

(3)  $P_n, Q_n$  のそれぞれについて  $n$  の偶奇で値が変わるので、漸化式も偶奇で場合分けを行う。

$z_{k+2} = -z_k$  となる確率は同じカードが2回連続で取り出された場合なので

$$\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3} + \frac{2}{3} \cdot \frac{2}{3} = \frac{5}{9}$$

一方で、 $z_{k+2} = z_k$  となる確率は異なるカードが取り出された場合であるので

$$\frac{1}{3} \cdot \frac{2}{3} + \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{3} = \frac{4}{9}$$

(1) の結果を合わせて,  $n$  が奇数のときは  $P_n = 0$ ,  $n$  が偶数のときは  $Q_n = 0$  であることがわかる. また,  $Q_1 = \frac{2}{3}$  であることを考慮して漸化式は以下のように書くことができる.

$$P_n = \begin{cases} 1 & (n=0) \\ 0 & (n \text{ は奇数}) \\ \frac{5}{9} - \frac{1}{9}P_{n-2} & (n \text{ は } 2 \text{ 以上の偶数}) \end{cases}$$

$$Q_n = \begin{cases} \frac{2}{3} & (n=1) \\ 0 & (n \text{ は偶数}) \\ \frac{5}{9} - \frac{1}{9}Q_{n-2} & (n \text{ は } 3 \text{ 以上の奇数}) \end{cases}$$

$P_n$  について,  $n$  が 2 以上の偶数の場合の漸化式を整理して解く. すると以下ようになる.

$$\begin{aligned} P_n &= \frac{5}{9} - \frac{1}{9}P_{n-2} \\ \Leftrightarrow \left(P_n - \frac{1}{2}\right) &= -\frac{1}{9}\left(P_{n-2} - \frac{1}{2}\right) \\ \Leftrightarrow P_n - \frac{1}{2} &= \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n}{2}} \cdot \left(P_0 - \frac{1}{2}\right) \\ \Leftrightarrow P_n &= \frac{1}{2} \left\{ 1 + \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n}{2}} \right\} \end{aligned}$$

同様に,  $Q_n$  について  $n$  が 3 以上の奇数の場合の漸化式を整理して解く. すると以下ようになる.

$$\begin{aligned} Q_n &= \frac{5}{9} - \frac{1}{9}Q_{n-2} \\ \Leftrightarrow \left(Q_n - \frac{1}{2}\right) &= -\frac{1}{9}\left(Q_{n-2} - \frac{1}{2}\right) \\ \Leftrightarrow Q_n - \frac{1}{2} &= \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n-1}{2}} \cdot \left(Q_1 - \frac{1}{2}\right) \\ \Leftrightarrow Q_n &= \frac{1}{2} \left\{ 1 + \frac{1}{3} \cdot \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} \end{aligned}$$

よって,

$z_n = 1$  となる確率は

$$\begin{cases} 0 & (n \text{ が奇数}) \\ \frac{1}{2} \left\{ 1 + \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n}{2}} \right\} & (n \text{ が偶数}) \end{cases}$$

$z_n = i$  となる確率は

$$\begin{cases} 0 & (n \text{ が偶数}) \\ \frac{1}{2} \left\{ 1 + \frac{1}{3} \cdot \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} & (n \text{ が奇数}) \end{cases}$$

$z_n = -1$  となる確率は  $n$  が奇数のときは  $z_n = 1$  と同様に 0 である.  $n$  が偶数のときは  $z_n = 1, -1$  であることを考慮して

$$\begin{cases} 0 & (n \text{ が奇数}) \\ 1 - \frac{1}{2} \left\{ 1 + \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n}{2}} \right\} & (n \text{ が偶数}) \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} 0 & (n \text{ が奇数}) \\ \frac{1}{2} \left\{ 1 - \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n}{2}} \right\} & (n \text{ が偶数}) \end{cases}$$

$z_n = -i$  となる確率は  $n$  が偶数のときは  $z_n = i$  と同様に 0 である.  $n$  が奇数のときは  $z_n = i, -i$  であることを考慮して

$$\begin{cases} 0 & (n \text{ が偶数}) \\ 1 - \frac{1}{2} \left\{ 1 + \frac{1}{3} \cdot \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} & (n \text{ が奇数}) \end{cases} \iff \begin{cases} 0 & (n \text{ が偶数}) \\ \frac{1}{2} \left\{ 1 - \frac{1}{3} \cdot \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} & (n \text{ が奇数}) \end{cases}$$

(4) 偶奇で場合分けをする. すると

$$\begin{aligned} & 1 \cdot (z_n = 1 \text{ である確率}) + (-1) \cdot (z_n = -1 \text{ である確率}) \\ \iff & \frac{1}{2} \left\{ 1 + \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n}{2}} \right\} - \frac{1}{2} \left\{ 1 - \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n}{2}} \right\} \\ \iff & \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n}{2}} \\ \iff & \left(\frac{i}{3}\right)^n \end{aligned}$$

同様にして奇数の場合も整理すると,

$$\begin{aligned} & i \cdot (z_n = i \text{ である確率}) + (-i) \cdot (z_n = -i \text{ である確率}) \\ \iff & \frac{i}{2} \left\{ 1 + \frac{1}{3} \cdot \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} - \frac{i}{2} \left\{ 1 - \frac{1}{3} \cdot \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} \\ \iff & \frac{i}{3} \cdot \left(-\frac{1}{9}\right)^{\frac{n-1}{2}} \\ \iff & \frac{i}{3} \cdot \left(-\frac{i}{3}\right)^{n-1} \\ \iff & \left(\frac{i}{3}\right)^n \end{aligned}$$

よって, 題意は示された.

(5)  $z_n = w_n$  である確率はそれぞれが  $1, i, -1, -i$  である確率の積の和である. ゆえにこの確率の和を求めればよい. このためにまず  $w_n$  についての確率を求める.  $z_0$  と同様に  $w_0 = 1$  であり, 色の変化による値の変化は確率が変わるだけで (1) についてのことは  $w_n$  についても当てはまる. ここで 2 回カードを引く時異なる色が出たら

$$w_{k+2} = w_k$$

となる. 一方で 2 回とも同じ色のカードを引いたときは

$$w_{k+2} = -w_k$$

となることは, 次のようにまとめることができる.

$$\begin{cases} P(z_n = 1) = P(w_n = 1) \\ P(z_n = -1) = P(w_n = -1) \\ P(z_n = i) = P(w_n = -i) \\ P(z_n = -i) = P(w_n = i) \end{cases}$$

したがって, 偶奇で場合分けして確率を求めると以下のようなになる.

まず, 偶数のときとりうる値はどちらも  $1, -1$  であるから

$$\begin{aligned}
 P(z_n = w_n) &= P(z_n = 1)P(w_n = 1) + P(z_n = -1)P(w_n = -1) \\
 &= P_n^2 + (1 - P_n)^2 \\
 &= 2P_n^2 - 2P_n + 1 \\
 &= 2 \cdot \left[ \frac{1}{2} \cdot \left\{ 1 + \left( -\frac{1}{9} \right)^{\frac{n}{2}} \right\} \right]^2 - 2 \cdot \left[ \frac{1}{2} \cdot \left\{ 1 + \left( -\frac{1}{9} \right)^{\frac{n}{2}} \right\} \right] + 1 \\
 &= \frac{1}{2} \cdot \left\{ 1 + 2 \cdot \left( -\frac{1}{9} \right)^{\frac{n}{2}} + \left( -\frac{1}{9} \right)^n \right\} - \left\{ 1 + \left( -\frac{1}{9} \right)^{\frac{n}{2}} \right\} + 1 \\
 &= \frac{1}{2} \cdot \left\{ 1 + \left( -\frac{1}{9} \right)^n \right\}
 \end{aligned}$$

奇数のときはとりうる値はどちらも  $i, -i$  であるから

$$\begin{aligned}
 P(z_n = w_n) &= P(z_n = i)P(w_n = i) + P(z_n = -i)P(w_n = -i) \\
 &= Q_n(1 - Q_n) + (1 - Q_n)Q_n \\
 &= 2Q_n(1 - Q_n) \\
 &= 2 \cdot \left[ \frac{1}{2} \cdot \left\{ 1 + \frac{1}{3} \cdot \left( -\frac{1}{9} \right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} \right] \left[ \frac{1}{2} \cdot \left\{ 1 - \frac{1}{3} \cdot \left( -\frac{1}{9} \right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} \right] \\
 &= \frac{1}{2} \cdot \left\{ 1 - \frac{1}{9} \cdot \left( -\frac{1}{9} \right)^{n-1} \right\} \\
 &= \frac{1}{2} \cdot \left\{ 1 + \left( -\frac{1}{9} \right)^n \right\}
 \end{aligned}$$

まとめると,

$$\frac{1}{2} \cdot \left\{ 1 + \left( -\frac{1}{9} \right)^n \right\}$$

(6)  $w_n$  について考える. 偶数のときは確率が同じなので  $z_n$  と同じである. 一方で奇数のときは次のようになる.

$$\begin{aligned}
 &i \cdot (w_n = i \text{ である確率}) + (-i) \cdot (w_n = -i \text{ である確率}) \\
 \Longleftrightarrow &\frac{i}{2} \left\{ 1 - \frac{1}{3} \cdot \left( -\frac{1}{9} \right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} - \frac{i}{2} \left\{ 1 + \frac{1}{3} \cdot \left( -\frac{1}{9} \right)^{\frac{n-1}{2}} \right\} \\
 \Longleftrightarrow &\frac{i}{3} \cdot \left( -\frac{1}{9} \right)^{\frac{n-1}{2}} \\
 \Longleftrightarrow &-\frac{i}{3} \cdot \left( -\frac{i}{3} \right)^{n-1} \\
 \Longleftrightarrow &-\left( \frac{i}{3} \right)^n
 \end{aligned}$$

よって,

$$E(z_n + w_n) = E(z_n) + E(w_n)$$

であるから,

$$E(z_n + w_n) = \begin{cases} 2 \cdot \left( \frac{i}{3} \right)^n & (n \text{ が偶数}) \\ 0 & (n \text{ が奇数}) \end{cases}$$

(7) 期待値について,

$$E(z_n w_n) = E(z_n)E(w_n)$$

---

であるから,

$$E(z_n + w_n) = \begin{cases} \left(-\frac{1}{9}\right)^n & (n \text{ が偶数}) \\ -\left(-\frac{1}{9}\right)^n & (n \text{ が奇数}) \end{cases}$$

- [1] Proofs involving the Moore-Penrose inverse. [https://en.wikipedia.org/wiki/Proofs\\_involving\\_the\\_Moore%E2%80%93Penrose\\_inverse](https://en.wikipedia.org/wiki/Proofs_involving_the_Moore%E2%80%93Penrose_inverse)